

平成 16 年 4 月 22 日 第 37 回原産大会午餐会

原子力委員長所感

このたびは、「どう考える－明日の日本の原子力」を基調テーマに第 37 回原産年次大会が大変盛大に開催されましたこと、西沢会長、茅大会準備委員長をはじめとする大会関係者のご尽力の賜物と、心からお祝いを申し上げます。また、昨日そして今日午前の討議の内容は時宜を得てしかも深いものでありました。このことに対して、講演者そしてご参会の皆様は心から敬意を表します。

暗黙の了解なのかもしれませんが、委員会というのは一人ではなににもできない人の集まりであり、付託事項について、やはりそれはできないと決めるところ」といわれています。小生、原子力委員長を拝命した際に、これに例外を作ろうと考え、就任最初の日に関員各位と諮って、

- ・ 民主的手続きなくして権威なし」を肝に銘じ、専門家と一般市民の政策提案や意見に広く耳を傾け、そこから国民が共有するべき原則と目標を見出すこと、提案された政策選択肢をできるだけ定量的に評価した上で選択することにより、政策選択の根拠の明確化を図ることにしたいこと
- ・ 研究開発活動にしろ、事業にしろ、ことを進めるにあたっては様々なリスクがあることを踏まえ、そのリスクを管理する責任者に対して、その管理を確実に行之、その妥当性の説明責任を果たすことを求めたいこと
- ・ こうした考え方に則って、専門家や市民を含む各界各層の皆様の原子力開発利用に対するビジョンをお聞きしつつ、その実現に向けての今後の政府の取り組みのあり方について検討を行って参りたいこと

を年頭の所信として決定させていただきました。しかし、考えて見ますと、これとて、皆様からビジョンをいただけないと何もできませんと決めたことになっているので、暗黙の了解の例外になっていないのかもしれませんが。そこで、皆様におかれましては、この点よろしくご理解くださり、委員会に対して積極的にビジョンの提言をいただけますよう改めてお願い申し上げます。

さて、これまで、原子力委員会は、電気事業者が原子力発電設備を設置し、信頼性の高い運転を行うことによって、わが国が、経済性の高い電気の供給を、温室効果ガスをほとんど排出せずして、しかも海外情勢に影響されること少なく安定的に確保できることに着目して、わが国の電源構成においてこれが適切な割合を占めることが望ましいと判断してきました。そして、この判断に基づき、関係行政当局に対して、バックエンド対策を含むその事業に対する厳格な安全規制活動の実施と、その公益の大きさに見合う事業誘導ための効果的な施策やその公益の評価を市場に反映する措置を講じることを求め、産業界に対しては、国民の期待に応えられるように、その安全性、信頼性、経済性を確保しつつ、関連施設を建設・運転するよう促してまいりました。

その結果、皆様ご高承のとおり、現在、一般電気事業者により設置されています原子力発電所は、発電電力の 1/3 を供給しており、基幹電源のひとつとして認識されるまでになっております。また、関連する燃料サイクル事業につきましては、折角地球から掘り出したウランを燃料にするところ、レデュース、リユース、リサイクルという循環型社会形成のための基本方針を先取りして、処分すべき廃棄物を本当に利用価値のないものに限ることを基本方針としてきたところ、民間の努力により燃料製造、ウラン濃縮、低レベル放射性廃棄物処分の各事業がすでに軌道に乗っており、使用済み燃料の中間貯蔵と国内再処理及び高レベル放射性廃棄物処分の各事業が準備中と認識しております。

しかしながら、この数年間わが国原子力界は、決定し、市民に対して通知し、説明するという古典的アプローチがもはや通用しなくなった社会の変化に戸惑い、プロアクティブに対応することをためらってきた結果として、ついに自らの事業の展望を困難にするカオスの発生を招き、その渦中で苦しんできたと思います。そこで私は、現代社会においてはカオスの発生は避けられないと覚悟し、様々な社会現象に通底するカオスを招く諸原理を正しく把握してカオスの発生を予見して、その影響を最小限に食い止めるべく積極的に行動することが肝要と考え、様々な機会に、そのために有効な行動様式のひとつとして、リスクコミュニケーションを含むリスク管理活動とその品質マネジメントシステムを確立して、これの継続的改善を図るべきことを提言して参りました。このことからして、私は、規制行政当局が、事業者のこの品質マネジメントシステムの健全性の監査を規制活動に取り入れることを決定して昨年 10 月よりその実施に取り組んでいること、そして、昨日、西澤会長が所信表明にお

いて、日本原子力産業会議が設立時の精神を思い起こして、産業界の自己責任に基づく活動の担い手たらんと、自己変革に取り組み、二つの新しい組織を生み出すと発言されたことを、まことに僭越ながら、高く評価するものです。

ここで、目を世界に向けますと、現在 440基の原子力発電ユニットが運転中であり、世界の電力の約 6 分の 1を供給しております。また、引き続き約36基が建設中ですが、その半数以上が経済発展の著しいアジア地域に所在します。これはこの地域に、よい統治を実現する強いリーダーシップが存在することを示すものです。この地域で核不拡散を厳守しつつ原子力発電の利用が拡大することは、地球温暖化問題の深刻化を抑制する観点から望ましいことですから、この地域の国々のこうした取り組みを IAEA の保障措置体制の下に置くことを条件に、国際的にも支援していくことが重要と考えます。具体的には、関係国間のパートナーシップを通じてその取り組みに係る規制 誘導の制度整備を含むオーナーシップの確立に協力するとともに、いわゆる南・南協力による開発経験の共有と伝播を促進することが重要と考えます。私は、この判断に基づき、関係行政機関に対して、このための行動を促していく所存です。

ところで、51年前、米国のアイゼンハワー大統領は国連総会において原子力平和利用のビジョンを提示し、世界に深い感銘を与えましたが、人類は、その後、このビジョンの輝きを損ねる出来事も少なからず引き起こしてきました。核兵器拡散、原子力発電所の炉心損傷事故、適切にできるはずの放射性廃棄物の処分活動の遅れ等がそれです。しかし、私は、これらの経験を通じて人類は、今日のわが国もそうであるように、このビジョンの輝きを維持するための教訓を数多く学び、今日も学び続けていることを強調したいと思います。そして、この教訓のエッセンスは、社会が科学技術の効用を享受することができるためには、科学技術活動に携わる人々が、その有用性のみならず、その利用に際して負の側面が顕在化するリスクがあることを認識し、そうしたリスクを高い倫理感に基づき積極的に管理していく、その管理活動のあり方を、施設周辺住民を含む利害関係者の参加を求めて決定していくことが重要、ということだと考えています。

「どう考える 明日の日本の原子力」を基調テーマに掲げる今年の原産年次大会は、明日に備える、つまり、不確実な未来に備えるリスク管理活動として、原子力科学技術を如何に

効果的かつ効率的に利用すべきかを考える知的作業を、様々なセクターの人々が共同して行う絶好の機会と思います。

このような問いかけに対する取り組みのあり方について私見を申し上げれば、それには短期、中期、長期の3つの時間的枠組みで検討された、進取の気性に富む行動の組み合わせを追求することが肝要と考えます。このうち短期的活動は、申し上げるまでもなく現在利益を生み出している設備・システムを、人々の信頼を得つつ、できるだけ長く有効に活用するために、効果的な創意工夫を見出し、施すことです。また、中期的活動は、現有設備・システムが陳腐化する時代の到来を予測して、その時代においても競争力があり、人々に受け入れられる革新的設備・システムでこれらを代替していく準備を整え、時宜に適った取替え活動を行なうことです。さらに、長期的活動は、原子力技術の新しい市場を開拓したり、現在のエネルギー供給市場構造を変えたりする可能性のある革新性の高い技術を研究開発し、その原型システムの運転を通じて実用化に至る問題点を把握する活動であり、主に政府の研究開発機関によって実施されるべきものです。中長期の活動は、知的創造力と技術的冒険心を要求し、それにも係らず、失敗するリスクが小さくありません。そこで、政府は、公益追及の観点から、これらに適切な水準の資金を投じるとともに、そこでの知恵の生まれ具合について多面的な観点から定期的に評価することを忘れてはいけません。

以上、お食事前にやや細かいお話を申し上げましたが、ご参会の皆様方におかれましては、このような考え方もあることを頭の隅に留め置かれ、それぞれにお持ちのアイゼンハワー大統領のビジョンの実現を目指す熱い思いと優れた知見を、人類の夢と希望の実現に寄与する明日の日本の原子力のためにどのように生かしていくべきかについて今日の午後と明日一日をかけて十分に検討され、その成果を皆様のビジョンとしてとりまとめられますよう心からご期待申し上げ、所感とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。